

沖縄尚学の初優勝で幕を閉じた第一〇七回全国高校野球選手権大会。広島・広陵が一回戦の旭川志峯（北北海道）戦を突破した後、部内の暴力事案をめぐり、出場を辞退して物議をかもした。暴力事案の出場辞退は過去にもあったが、不祥事による開幕後の出場辞退は春夏の甲子園で史上初めて。コンプライアンスが厳しくなった令和の時代に、高校野球はいまも前時代的な残滓が残っているようにも映る。

各種報道によると、一年生が今年一月、寮で禁止されている即席麺を食べ、複数の二年生がとがめて、殴るなどしたとされる。日本学生野球憲章は学生野球の基本原理として、「一切の暴力を排除し、いかなる形の差別をも認めない」と明記する。日本学生野球憲章の記述がなくても、暴力が許されないことは言うまでもない。問題は、暴力が起きてしまったとき、周囲の大人たちがどのような対応を取るのかだ。

◇ ◇

広陵側は今回、部員らから聞き取り調査を行い、加害生徒を謹慎させた。日本高校野球連盟（高野連）にも報告し、高野連は三月、同校を「嚴重注意」としている。日本学生野球憲章に基づく規則では、嚴重注意は原則非公表で、高野連や同校は事案について発表していなかった。しかし、被害生徒の保護者とされる人物が七月下旬以降、SNSで事案について投稿。加害生徒は同

前時代的な残滓

校調査で認知された人数よりも多かったことなどを訴え、同校に批判が殺到した。

一昔前ならば、高野連や学校の決定に異を唱えることは難しかっただろう。しかし、今はSNSがある。誰でも自由に社会に発信することが可能だ。学校側が被害生徒やその保護者に寄り添い、丁寧に事実関係を調査したのか。そして、事実の隠蔽や矮小化はなかったのか。おそらく学校経営にも直結するであろう野球部員の不祥事に對し、同校の校長や監督ら周囲の大人たちが「いかなる理由があってもダメなものダメ」と毅然と対応し、被害生徒やその保護者がそれらの対応に納得していれば、SNSに不満をおつけることもなかったはずだ。

さらに、別の暴力事案がSNSで拡散されたこともあり、同校は甲子園の出場を辞退するに至った。こうした過程で、SNSでは寮への爆破予告や無関係の生徒への中傷なども起こり、会見を開いた同校の校長は出場辞退の理由について、「生徒、教職員らの人命を守ることが最優先と考えた」などと説明した。爆破予告などももちろん、決して許される投稿ではない。SNSの「負の側面」が表れてしまった形だが、だからと言って、学校側がまるで被害者のような言いつぶりの会見に違和感を感じた方もいたであろう。被害者はあくまで暴力を振るわれ、転校を余儀なくされた生徒であり、

被害生徒から見れば、学校側は加害生徒の肩を持つ存在でしかないからだ。

◇ ◇

もうひとつの論点で言えば、高校野球を報道するマスコミの姿勢も影響を与えていなかったか。甲子園に出場すれば、敗退するまでの間、当該高校のニュースや記事が大量に発信される。敗れて帰郷しても、報道されることもある。これらが学校経営者にとって絶好のPRになることは言うまでもない。過剰な勝利至上主義の高校があるとすれば、そうなった原因の一端はマスコミにあると言っても良いだろう。

日本の報道はややもすると、取材対象者に食い込むことが主眼となり、対象者への批判が甘くなりがちだ。特にスポーツ報道はその傾向が強くなり、例えばプロ野球では選手やチームの批判はほとんど目にしないのが現状だ。今回の暴力事案も、広陵のみの問題としてとらえてしまえば、一過性の報道で終わってしまう。しかし、今回のような事案は広陵だけにとどまらず、全国のどの高校、どの競技でも起こりうるはずだ。第二の広陵を生まないためにも、そして、前時代的な残滓を取り除くためにも、マスコミを含めた周囲の大人たちは今一度、「なぜ暴力が許されないのか」を見つめ直し、高校生らに伝える必要がある。

△陽▽